
さぁ野菜痛めを作ろうか

真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さあ野菜痛めを作ろうか

【Nコード】

N3608T

【作者名】

真

【あらすじ】

魔王に殺されてしまった主人公。しかし、魔王にチート能力をもらいネギまの世界へ行く。
かなりアンチになる予定なので、それが嫌なら見ない方がいいと思います。

プロローグ（前書き）

初投稿です。駄文で申し訳ないですが読んでやってください。

プロローグ

「ここ何処だ？」

家で寝ていたはずなのにいつの間にもやら俺は変な城の前に居た。

なんかかなりのイケメンがこつちを見ているが・・・

「うん、夢だな。よし寝るか。」

だが、俺はあまりにも眠いので考えることを止め、欲求に身を委ねることにした。

「お前、寝るのはいいが。寝たら存在が消えるぞ。」

しかし、なにやらイケメンが話しかけてきたようなので相手をしてやることにした。(かなりめんどくさいが)

「俺の眠りを妨げる貴様は誰だ。俺は早く寝たいんだよ。」

「我か？我はお前達から見れば悪魔かな。しかも、王だ。」

「(えー、この人何言ってるの。頭大丈夫なのか？悪魔の王って魔王のことだろ。うわっ、邪気眼みたいなの初めて見たわ。) あー、はいはい魔王様ね。きぐーだねえ、俺もよく魔王って呼ばれるんだよね。まあネトゲとかの中だがね。で、俺になんか用でもあんの？」

「つかここは何処だ？」

俺は目の前の自称魔王の反応を観察する。

「誰が邪気眼だ！お前、我が魔王だと全然信じていないな？そして、ここは魔界の最下層にある我が城、魔王城だ！！」

なんか知らんが、1人でテンションが上がった自称魔王。だが、(こいつ俺の考えたことを読んだのか？しかも、魔界か。そう言われれば、周り是如何にも魔界って感じがするがあり得んだろ。だとすると、やはり夢か？)

「魔王だからな。人間の思考を読むなど簡単なことだ。それと、これは夢ではないぞ。お前は死んだのだからな。」

「また、考えたことを読みやがって。はあ、まあいいか・・・って、

待て貴様今何て言った？俺の聞き間違えではなければ、死んだとか何とか言わなかったか？」

俺は自称魔王の言葉に耳を疑って、もう一度聞き返した。

「ああ、お前は死んだぞ。と言うか、我が間違えて殺したな。」

・
・
・

「はぁー！？それマジで言ってるの？死んだって、今月は楽しみにしてたゲームとかマンガが発売だったのにー。絶望した。こんな理不尽な世界に絶望したー。この悲しみを何処にぶつけたいんだ。責任者出せー。責任者ー・・・って、待て貴様間違えて殺しただと。貴様の責任かー。死ねえ。」

俺の黄金の右ストレートが唸りをあげる。が、流石は自称魔王楽に避けられてしまう。

「待て、落ち着け。流石に魔王の我でも悪いと思ってな。詫びに生き返らしてやるためにわざわざ天界に行くはずのお前の魂を魔界まで引っ張ってきたのだ。」

「えっ、マジで！？なんだよ、それを早く行ってくれよ。そしたら、いきなり殴りかかったりしなかったのに。じゃあ、早く元の世界に生き返らしてくれよ。」

俺は、話しのわかる魔王で（自称はもういないだろ）良かったと思いつつ。魔王の返事を待つ。

「無理だな。」「てめえ、今度こそ受けてみる黄金の右ストレートを。」

「だから、当たらんわ。」

またしても、俺の黄金の右ストレートは空を切る。

「まあ落ち着いて最後まで話を聞け。残念ながら、元の世界でのお前の体はなくなっているのだ。」

「どういうことだ？貴様は魔王なのだから、体ぐらい作り出せるだろう？。」

魔王のくせに、それぐらいも出来ないのかと、疑問に思う。

「体ぐらいなら簡単だ。」「なら！！」まあ待て。一から説明していく。まず、お前を何故殺してしまったのかだ。これは、我を裏切ろうとした奴を殺そうとしたからだ。我が直々に殺そうとしたのだが、遊び過ぎて人間界に逃げ込んでしまった。だから、我も奴を追い人間界に入った。そして、とどめを刺そうとした時に、強く攻撃をしてしまい。その下に住んでいたお前ごと射ち抜いてしまったのだ。」「死んだ経緯はわかった。それだけなら別に生き返せない理由にはならないだろう。」「

ものすごくイライラしているが、最後まで話を聞くために先を促す。

「そうだ、これだけなら別にどうともなかったのだがな。生き返らせてやれない理由は大きく三つある。一つめは、我の攻撃でお前の体が塵と化したからだ。体が綺麗に残っていれば大丈夫だったのだがな。二つ目は、お前が我ら悪魔に性質が似ていたからだ。まあだからこそ我の力をお前に使えるのだがな。最後に、天界がお前の生きていた跡を消し去ったからだ。お前は本当ならば、別の世界に産まれるはずだったのだが。天界のミスでこの世界の人間界に産まれたのだ。だから、天界の奴等はこれ幸いとこの機会にお前の存在を消し、正しい世界に戻そうとしたのだ。なので、私の力で人間界に復活させてしまえば、お前は天界から沢山の刺客に命を狙われることになる。この三つの理由によって、お前をそのまま生き返らせることはできないのだ。ちなみに、最初お前が異常な睡魔に襲われたのは、お前の魂に我の力が馴染んでいなかったために、天界の修正力に負けていたので異常な睡魔に襲われたのだ。あのまま寝ていたら存在が消されて正しい世界でミジンコに生まれ変わる予定だったな。」「

「ミジンコ！？良かった眠らなくて。それより、理由はわかったがならどうやって生き返るんだ？他の世界でも結局イレギュラーとして消されてしまうのではないのか？」

ミジンコに生まれ変わることがなくなっただのに安堵しつつ、疑問を

ぶつける。

「そのことなのだが、今人間たちの間で流行っている。アニメやマンガ、ゲームの世界に転生をやってもらおうと思ってる。これらの世界なら天界も干渉をしてかないからな。」

「テンプレキター！マジでそんなことが有るなんて。転生物の二次小説読んで実は懂れてたんだよな。もちろん特殊能力とかくれるんだよな？」

懂れのチート転生が出来るのがわかり、一気にテンションがMAXになる。

「送る世界はこちらで決めさせてもらうが、能力についてはお前に三つまで決めさせてやろう。」

「三つか。うおー、何にしようかなー。あつ、ちなみに何処の世界なんだ？」

「魔法先生ネギまの世界だな。ちなみに、魔法先生ネギまの平行世界だから、原作ブレイクしても全然問題ないからな。大いにやってくれ。基本的な魔力と気は魔力はこのかの二倍、気はラカンより少し多いぐらいかな。」

「ネギまか。女の子たちは好きなんだがな、あの野菜とかぬらりひよんは大嫌いなんだよな。まあ原作ブレイクOKなら大丈夫か。よし、ネギまなら戦闘技術が必要になるな。じゃあ、一つ目の能力はテイルズオブヴェスペリアの全術技とユーリの剣術・身体能力を頼む。ちなみに術技は最初からMAX錬度で。」

テイルズシリーズはヴェスペリアが一番好きなんだよな。特にリタがお気に入り。

「いいだろう。術はネギまでの魔力を、技は気で使うようにしておくからな。」

「サンキュー。よし二つ目は、BLEACHの全斬魄刀をくれ。」

「ふむ。なら、出したい斬魄刀を思い浮かべると出てくるFateの王の財宝みたいな感じにしてやろう。それと、サービスで卍解もちゃんと出来るようにしておこう。」

「三つ目は魔道具・魔道薬作りの才能で頼む。」

「なら、作りたい物のレシピがすぐに浮かぶようにしておくな。よし、この三つで確定だな？もう変更出来ないぞ。」

「ああ。これだけで十分だよ。」

しかし、これはかなりのチートだな。斬魄刀の鏡花水月を使えばほぼ無敵だし。

「では、能力も決まったことだし、そろそろお別れだ。せいぜい我を楽しませてくれよ。じゃあな。」

魔王がそう言いながら指を鳴らすと俺の足下に穴があいた。

「えっ？ちょ待てやこらー！！貴様は絶対いつか殴ってやるからない。」

俺は、いきなりあいた穴に落ちていく。そのまま落ちていくと、だんだん意識が遠くなっていき。そして、視界は暗転した。

プロローグ（後書き）

自分の文才の無さに絶望した。
週に一、二回は投稿出来たらいいと思ってます。

第一話 転生完了×少女×凛々の明星（前書き）

待ってた方も待ってなかった方もお待ちしました。第一話です。
ちなみにタイトルはハンター×ハンターの真似してみました。

第一話 転生完了×少女×凛々の明星

「しゅーりょー。」

今日のギルド活動が終わった。

あつ、俺の名前はユーリ・ローウェルだ。あのくそ魔王にネギまの世界に送られた者だぜ。何故に俺がユーリの名前を名乗っているかと言つと……

「ここ何処だ？」

俺が目覚めると木に囲まれていた。何故にこんなところで寝てんだ？

えーっと。ああそつだ。魔王の奴に穴に落とされて気を失ったんだ。

「てつ、あのくそ魔王が。いきなり穴に落としやがつて。ぜつてえぶつ殺……あつもしかしてここはもうネギまの世界じゃねえの？」

俺は確認の為に立ち上がり周りを見渡す。しかし、何か違和感を感じた。

「あれ？何かいつもより目線が高い気がするぞ。」

俺は背は平均より低く160しかなかったはずだ。なのに、今は確実に180ぐらいある。どうなつてやがるんだ？

そう考えていると、足下にカバンがあるのに気づいた。そのカバンを開けてみると、手紙が目についた。

「なにに。えー、目が覚めてこの手紙を読んでいると思う。とりあえず、転生には成功した。能力もちゃんと使えるはずだ。まずそこは原作開始のだいたい五年前の魔法世界だ。体を慣らしたりするために少し前にしておいた。カバンの中にいろいろ入れておいたから頑張ってくれ。」

P・S・お前の体を不老にしておいた。不死ではないから大怪我をすれば死ぬからな。だが、病気や呪いには耐性をつけておいた。P・S・のP・S・最後に、お前の体テイルズオブヴェスペリアのユーリ・ローウェルにしておいたから楽しんでくれ。

b y 魔王

・
・
・
えっ。」

カバンをあさり鏡を取り出して覗きこむとそこには、どこからどうみてもユーリが写っていた。

「マジで！！うおー、テンション上がるわー！！ユーリだよユーリ。なかなかいい仕事するじゃねえかあのくそ魔王。」

テンションが上がり跳ね回って喜んでいると。

「キヤーー。」

と近くから悲鳴が聞こえた。

「なんだなんだ？悲鳴か？うーん。行ってみるか。さすがにこのまま放置はな。それにもかしたら能力のテストも出来るかも知れないしな。」

そんなことを考えながら悲鳴がした方へ近づく。すると一人の女の子がそこそこの大きさのドラゴンに襲われていた。

「ありやヤバそうだな。とりあえず剣、剣つと。うーん。まあ『浅打』でいつか。ってヤバッ。」

「誰か助けてよお。」

いつの間にか今にも女の子はドラゴンに食べられそうになっていた。

「いやあ。死にたくない『蒼破っ！！』えっ？」

「大丈夫かお嬢ちゃん？」

私はお母さんにお花をプレゼントするために、ドラゴンがいるから絶対に一人で入ったら駄目と言われていた森までお花を摘みに来ていた。

「こんなに綺麗なお花ならお母さん喜んでくれるよね。」

ドラゴンは恐いけど、出会うことはないと思つて一人で来たけどやつぱり出て来なかったなあ。そう考えながらお家に帰っていたら、何かにぶつかつて倒れてしまった。

「キャ！？いったーい。もう何なの？・・・っ、キャー。」

そこにはおつきなドラゴンがいた。私はドラゴンの足にぶつかつたようだった。私は急いで立ち上がり走つて逃げたら、ドラゴンが追いかけてくる。必死に走つていたら木の根に引つ掛かり転けてしまう。後ろを見るとドラゴンはすぐそばまで来ていた。

「誰か助けてよお。」

私は食べられると思った。お母さんごめんなさい。もう約束破つたりしないから助けてよお。しかし、ドラゴンはその大きな口を開けて近づいてくる。

「いやあ。死にたくない「蒼破っ！！」えっ？」

目の前にいたドラゴンが吹き飛んで行つた。私が混乱していると優しい声が聞こえた。

「大丈夫かお嬢ちゃん？」

声の方を向くと、剣を持った黒い髪の毛の男の人が立っていた。

「ちよつと待つてな。すぐに済むから。その木に隠れてろ。」

私は声が出ずに首だけで肯定をあらわし、すぐに木に隠れた。しかし、気になったので、少し顔を出し覗いてみた。

危なかったあ。ギリギリ蒼破刃が間に合いドラゴンを吹き飛ばせた。「ちよつと待つてな。すぐに済むから。その木に隠れてろ。」

そう指示を出すと女の子はうなずきすぐに木に隠れた。

「さあーで、ドラゴンの方は？ありや、これじゃほとんど無傷か。仕方ない、『斬月』出てこい。卍・解『天鎖斬月』。いくぜ、『月牙天衝』。」

浅打を使った蒼破刃ではほとんど傷をつけられなかったので浅打を戻し、斬月を取り出した。このままでも大丈夫だが、卍解の威力を確かめたかったので天鎖斬月で月牙天衝を使ってみた。

「マジか！？全然力込めずにやったのに。やっべえ。卍解はよっぽどじゃなければ使っちゃまずいな。」

一割程の力にもかかわらず、ドラゴンは真つ二つなのはもちろん。後ろの森は1km程が丸太になっていた。呆然とその光景を見ると、背中に軽い衝撃があつた。見てみるとさっきの女の子が泣きながら抱きついていいる。

「ほらほら泣くなよ。もう大丈夫だから。お嬢ちゃんは何て名前なんだ？」

そう質問しながら頭を撫でてやると少し落ち着いて名前を覚えてくれた。

「私はリタ。リタ・モルディオだよ。お兄ちゃんのお名前は？」

「そっかリタっていうのか・・・えっ！？リタだつて？」

驚いてその女の子を見てみるとティルズオブヴェスペリアのリタ・モルディオにそっくりだった。

「どうしたのお兄ちゃん？私のこと知ってるの？」

不安そうな顔をしてリタがたずねてくる。

「いや、俺の知り合いと同じ名前だったから驚いただけだよ。」

そう言つてやると安心したのか笑顔を見せてくれた。

「そっか。よかったあ。お兄ちゃんのお名前は何ていうの？」

改めてリタが名前をたずねてきたが、どうしようか。

「（本当の名前は覚えてないんだよな。うーん。偽名も思いつかないし、ユーリの名前を使うかな。）俺の名前はユーリ・ローウェルだ。ユーリって呼んでくれ。」

「ユーリお兄ちゃんだね。助けてくれてありがとう。ねえお兄ちゃん私のお家に来てよ。助けてくれたお礼がしたいの。お母さんにも会って欲しいから。お願いお兄ちゃん。」
そう言いながらリタが手を引っ張る。

「わかったわかった。別に気にしなくてもいいんだけど、お言葉に甘えるよ。」

「ほんと？ やったあ。じゃあこっちだよ。」

リタに手を握られながら案内されて行く。

「ここが私のお家だよ。お母さんただいまー。お客さん連れてきたよ。」

「お邪魔します。」

ここに来るまでの間リタが教えてくれたが、リタの家は父親がいないらしい。しかも、最近は母親も病にかかってしまったそうだ。

「お帰りなさい、リタ。リタがお客さんを連れてくるなんて初めてね。ゴホッ。お客さんもゆっくりしてってください。」

「お母さん、これプレゼント。きれいなお花でしょ。」

リタが母親に摘んできた花を渡した。しかし、母親はその花を見ると

「リタ！！この花はドラゴンのいる森に生えてる物じゃない。危ないから行つてはダメだと約束したでしょう！！ドラゴンに出会ったらどうなるか。ゴホッゴホ。」

リタを叱りつけようとするが咳き込んでしまう。

「ごめんなさい、お母さん。もう約束破ったりしないから。けど、もう大丈夫だよ。森にいたドラゴンはユーリお兄ちゃんが倒しちゃうんだから。」

リタは何故か得意気な顔をしながら言ったので、俺は少しイラッとした。なので、軽くチョップをしてやめさせる。

「何故リタが得意気に言っている。貴様は俺がいなかったら今頃ド

ラゴンの腹の中だろうが!!」

それを聞いた母親は、ユーリに頭を下げる。

「そうだったんですか。本当にありがとうございます。あなたはリタの命の恩人です。どうかごゆっくりしてってください。ほら、リタももう一度お礼を言いなさい。」

「ユーリお兄ちゃん、今日は助けてくれて本当にありがとう。」

「頭を上げてくれ。別に気にしなくても大丈夫だ。たまたま居合わせただけなんだから。」

二人に揃ってお礼を言われ、自分では能力のテストをしただけなので、逆に申し訳なくなる。

「お礼といっではなんですが。ちょうど、お昼ご飯を作るところだったので食べてください。」

それくらいならと、お昼をご馳走になることにした。

お昼をご馳走になり、リタが離れて後片付けをしてくれているので少し気になったことを質問する。

「なあ、リタに聞いたんだが、病気なんだってな。大丈夫なのか？」

「はい、なんとか『正義の魔法使い（マギステル・マギ）』の方にも見てもらえたのですが。治すのにかなりのお金を要求されてしま

い。

症状は日に日に悪くなってきたしまして、なんとかまだ普通に動けますが・・・倒れたらと思うと。」

そうリタの方を見ながら答えてくれた。

（やっぱりこの世界の正義の魔法使い達はクズか？）

俺は少し考え、魔王にもらったカバンをあさり目的の物を探す。

「すまんが、俺にも体を診させてもらえないか？確認しないことにはわからないが、多分治せるかもしれん。」

俺はカバンから目的のアイテムを見つけたので聞いてみる。

「本当ですか！？しかし、私たちにはお支払い出来るお金が・・・」
「母親はそう言って顔を下げてしまう。」

「金なんていらねーよ。俺を『正義の魔法使い（クズ共）』といっしょにすんな。で？どうすんだ？」

クズ共と同類にみられ、語気が荒くなってしまった。

「すみません。あの、ではお願いしてかまいませんか？」

「わかった、だが確実ではないからな。じゃあ、少し診させてもらうぜ。」

承諾がとれたので、先ほど取り出したスペクタクルズを使う。そうすると、頭の中に情報が浮かんでくる。

「どうでしょうか？」

母親は不安そうに聞いてくる。

「これなら大丈夫だな。じゃあ治すぞ。『リカバー』」

俺はテイルズシリーズでは定番の回復魔法を唱えた。

「どうだ？一応治っているはずなんだが。」

「はい、とても楽になりました。もう体に違和感がないです。本当にありがとうございました。」

母親は感極まり泣きながらお礼を言ってくる。リタは母親が泣いていることに気がつき近づいてきた。

「お母さん、どうしたの？お兄ちゃんになんかされたの？」

そう言いながらリタはこちらを睨んでくるが、母親が

「違うのよりタ。お母さん、病気が治ったのよ。ユーリさんが魔法で治してくれたの。」

「ほ、本当に？お母さん、もう苦しくないの？よかったあ。ユーリお兄ちゃん、本当にありがとう。」

リタも母親が治って嬉しいのか、笑顔を浮かべながら涙を流している。

「気にすんな。俺には力が有って、目の前には笑顔になるべき困っている奴がいた。それだけだ。」

「本当にありがとうございました。どうやってお礼をすればいいか。」

「母親が頭を下げてくる。」

「だから気にしなくていいさ。俺は俺の正義を貫いただけなんだから。」

「そう言つてやると、リタが問いかけてきた。」

「せいぎ？それって『正義の魔法使い（マギステル・マギ）』ってこと？お兄ちゃんって正義の魔法使いだったんだ。」

「俺は俺。あんな奴らとは違うさ。正義とは自分で考えてみつけるもんだ。だがあいつらは人に正義を押しつける。しかも、自分たちが絶対に正しいと盲信しちまってるからさらに質が悪い。リタも頑張つて自分の正義を見つけてみな。」

「頭を撫でてあげながら言つてやる。」

「うーん。よくわかんないけどわかった。頑張ってみるね。で、お兄ちゃんは何をやってる人なの？」

「俺か？俺はな（どうしよっかなあ。とりあえずやりたいことはエヴァと千雨と超を助けるぐらいしかないしな。うーん。そうだ。ユーリになつたんだからギルドつくろう。）ギルドを始めたからメンバーを探してるんだ。」

「方針は決まつたので話しやるとリタが」

「じゃあ私がお礼にメンバーになつてあげる。ねえ、いいでしょ？」

「いや、俺は別にいいんだが、リタだけで決めるもんじゃないだろ。」

「そう言つて母親の方を向いてみると」

「あの、出来れば連れて行つてやつてもらえませんか？」

「なっ！？いいのか？まだ会つたばかりの俺に娘を預けるんだぞ。」
「母親の意外な答えに驚き確認する。」

「大丈夫です。あなたは見ず知らずの私たちを助けてくれましたし、あなたの目を見れば悪い人ではないのはわかります。それにリタにはもっと大きな世界を見てもらいたいですから。」

「そうか。わかった。本当にいいんだな？危険な目にあうかもしれ」

ないぞ。」

最後にリタに確認をする。しかし、リタは笑顔を浮かべながら

「大丈夫だよ。またユーリお兄ちゃんが絶対助けてくれるから。」

「はあ。しょうがない。ギルドに入るからにはビシビシ鍛えるから覚悟しておけよ。」

とりあえず一人目の仲間ができたが、頑張つて育ててやるか。

「ねえねえお兄ちゃん。そういえばギルド名って何なの？」

リタがギルド名について聞いてくる。

「ギルド名か？ギルド名はな。」

『凛々の明星』だ。フレイフヴェスベリア」

ということでは俺はユーリと名乗りギルドを始めることになったんだ。ギルド発足から三年たった。ギルドの人数もかなり増えてきたので、凛々の明星の活動はテイルズオブヴェスベリアに出てきたギルドを参考にして、五つの部隊にわけたんだが、

一つ目は、傭兵部隊にした。これは報酬次第でだいたいの事をする部隊だ。まあ一応依頼人の調査をした結果でしか依頼は受けないが、二つ目は、魔獣狩りを専門の部隊。これもちゃんとした調査をしてから依頼を受けることにしている。

三つ目は、武器や魔道具の製作・販売の部隊。これは一般用・戦士用・魔法使い用・特別注文、にわかれての販売になっている。

四つ目は、遺跡発掘部隊。遺跡の調査・探索・発掘を主に活動して珍しいアイテムを探している。

五つ目は、その四つを管理する事務部隊。他の部隊の金の管理や、依頼への人員配分をする。

この五つの部隊で凛々の明星はやっている。

「ユーリ、一人でなにやってんの？そっちの仕事が終わったならこ
っち手伝ってよね。まったく、気が利かないんだから。」

「はあ。リタ、一応俺はこのギルドのトップなんだからもう少し敬
意を持ってくれよ。」

俺が仕事が終わったのでくつろいでいると、リタがやってきた。

「敬意って、はっ。あんたがもつとしっかりしてくれるなら敬意ぐ
らいいくらでも持ってあげるわよ。」

あれから三年でリタはかなり成長した。今では原作のリタそっくり
になってしまった。

「昔はいつでもお兄ちゃんって呼んでくれて可愛かったのに、はあ。
もうリタは俺が嫌いになったんだな。お兄さんは寂しいよ。」

そう言っただけで悲しい表情をしてみると、リタが慌てて

「お兄ちゃんが嫌いなわけじゃない。ただ、まだ私は仕事にな
んだから。」

とちょっと拗ねた感じで言ってくる。

「わかってるよ。すこし昔の事を思い出してただけだから。さあ、
リタの仕事片付けようぜ。」

頭を撫でてやり、仕事にとりかかる。

「わかってないわよ。私はお兄ちゃんが・・・。」

「ん？なんか言ったか？」

リタが小さな声で俺を呼んだ気がしたので聞き返したが。

「なんでもないわよ。ばっかっ！！さっさと終わらせて帰るわよ。お
兄ちゃん。」

第一話 転生完了×少女×凛々の明星（後書き）

自分の文才の無さが恐ろしいコゲチビです。

ネギまのキャラクターを出さずにリタ出しちゃいました。他のティルズキャラクターは出さないと思うのでご勘弁を。

次回はちゃんとネギまのキャラクターを出します。ですが、その前にキャラクター紹介をはさみます。

キャラクター紹介

名前

ユーリ・ローウェル

年齢

転生時19歳

22歳

身長

転生前160cm

転生後180cm

能力

? テイルズオブヴェスペリアの全術技とユーリの剣術・身体能力

? BLEACHの全斬魄刀と斬魄刀の始解・卅解の発動

? 魔道具・魔法薬の製作スキル

? ネギまでの簡単な初級攻撃魔法・中級魔法や浮遊魔法・瞬動・虚

空瞬動

その他

ギルド『凜々の明星』のボス

不老

ユーリの体

カロルのカバン 変態ドS

解説

魔王に間違えて殺されてしまい、ネギまの世界に転生をした今作の主人公。転生前はかなりのゲーマーで、ネットゲーでは魔王と呼ばれていた。

高校三年で生徒会副会長だったが、仕事はほとんど会長に押し付けゲームをしていた。しかし、やる時はかなりやるのでそこそ慕われていた。

パツと見かなりひ弱に見えるためよく不良に絡まれた。しかし格闘技を習っていたので遠慮なくぼこぼこにして逆に迷惑料として金を払わせていた。

自分も悪だが、腐った悪が弱い者を虐げているのをみるとキレる。矛盾しているが、誇りある悪が自分の正義だとしている。

性格は、めんどくさがりで興味が惹かなければほとんど動かない。しかし、一度興味を惹いたり、やりはじめたりしたら最後までやりとおす。

自分が楽しむためなら命を賭けることをよしとしているので、度々大怪我をする。

人をじわじわと追いこんでいくのが大好きで、特に女の子の涙目が好き。なので周りから変態ドSの称号をつけられた。

魔王に貰ったカバンはテイルズオブヴェスピアに出てくるカロルのカバンだった。なので、どう考えても大きさと容量が合わない。

名前

リタ・モルディオ

年齢

ギルド加入時12歳

15歳

身長

ギルド加入時125cm

150cm

能力

? テイルズオブヴェスペリアのリタが覚える術技全て（秘奥技以外）

? ユーリと同じネギまの魔法や技術

? 魔道具・魔法薬の製作スキル

その他

凛々の明星のボス代理

解説

ユーリが転生してから初めて会った人物。ドラゴンに襲われているところを助けてもらったり、母親の病気を治してもらったりした。なので、お礼にギルドに入ると言いユーリについていく。しかし、本当は最初に助けてもらった時ユーリに一目惚れしていたので離れなくなかった気持ちの方が大きい。

今では、本気でユーリに惚れている。なので、ユーリに他の女の子を近づけさせないようにするのに忙しい。

父親は旧世界の優秀な魔法使い。母親も旧世界人なので、魔法世界出身の旧世界人。

性格は、昔は甘えん坊で素直ないい子だった。成長するにつれ仕事人や他の人の前ではユーリに甘えるのが恥ずかしくなりツンツンしてしまうが、二人きりや焦った時は口調が昔のようになる。

真面目で仕事熱心だが、遺跡で珍しいアイテムが発掘されると仕事を放置し、自分の研究室に閉じ籠ってしまう。

ユーリと修行してかなり強くなったが、模擬戦でユーリにいじめられているうちに、自分がMだと気づいた。

キャラクター紹介（後書き）

キャラクター紹介はまたどこかに挟みます。

第二話 手紙×侵入×遭遇（前書き）

今回も駄文で申し訳ないです。

第二話 手紙×侵入×遭遇

「ユーリ。聞きたい事があるんだけど？つてあれ？お兄ちゃんいないじゃない。」

私は仕事の話しでお兄ちゃんの私室を訪れるが肝心なお兄ちゃんがない。

「もう、どこ行つたのよ。いつもいつも黙って出かけるんだから。はあ。」

お兄ちゃんをよく一人でフラツといなくなる。でも、いつも一週間ぐらいで帰ってくるので特に心配もしないが。

「ん？なにこれ手紙かな？」

お兄ちゃんの机の上にリタへと書かれた封筒が有った。

「珍しいわね。お兄ちゃんが手紙残すなんて。えーとなになに。」

おはこんばんちわ。ちょっと旧世界に行ってくる。いつ帰るかはわからないのでギルドは任せた。じゃあよろしくな。

byユーリ

はあー！？ちょっと待ちなさいよ。ギルドは任せたつて、バカじゃないの。しかも、旧世界でいつ帰るかわからないとかふざけすぎでしょ。それに、どうしよう！？目を離すといつも女の子と仲良くなつちやうのに。お兄ちゃんが盗られちやう。私のお嫁さん計画が狂つちやうじゃない。あーもー、お兄ちゃんのバカーー！！」

一方その頃、俺は目的地の麻帆良学園に到着していた。

「すっげえー、生で見ると迫力が違うなー！！」

漫画やアニメで見た麻帆良学園に感動をして、写真を撮りまくって

いると

「お兄さんつてもしかして外から来たのかにや？」

女の子に後ろから声を掛けられた。

「そうだ。立ち入り禁止だったから不法侵入してきた。」

と軽く答え、写真を撮り続ける。

「すごい！！どうやって入ったの？」

「段ボールを被ってだな。」

「段ボール！？」

とりあえず、写真は満足したのでカメラをしまい振り返る。するとなんか見たことある可愛い女の子がびつくりしていた。

「そつ、段ボール。段ボールをバカにするなよ。某蛇の愛用品だからな。他にも・・・」

と適当に段ボールについて喋りながら考える。あの子って絶対明石裕奈だよなあ。どうしよっかな。

「すすすごいんだ、段ボールつて。裕奈ちゃん感心しちゃったにや。」

「

「まあ嘘だが。」

「嘘なの！？」

「当たり前だ。普通段ボールがポツンと有れば不審に思うだろ。」

「確かに！」

なかなかの反応に楽しくなりからかっていると、

「なにやってんの裕奈ー。遊びに行くんじゃないの？つてこの人誰！？」

ピンク髪をツインテールにした女の子がやって来た。

「にやはは、ごめんごめん。ちょっと話し込んでたよ。」

どうやら二人は待ち合わせをしていたらしい。

「それでこの人は誰なの？あつもしかして裕奈の彼氏！？」

まき絵はやはり俺が気になるようで更に裕奈に聞いている。

「違うつてば！！この人はさっき会ったばかりで名前も知らないよ。」

「

裕奈が焦って誤解を解こうとしているが、

「すまんが俺はもう行くぞ。追っ手が追いついて来たからな。」

遠くに数人の教師がこちらに走って来ていた。それに気づき逃走の準備を始める。

「あれ、もう行っちゃうのかにや？」

「言つたろ、俺は不法侵入してきたつて。ほら、追っ手が来たから逃げないと。捕まる訳にはいかんしな。」

「えっ、不法侵入は本当だったの!？」

「まあとりあえず行くからな。じゃ!」

準備が終わり逃走にはいる。しかし、最後に裕奈が声を掛けてくる。

「あつ! 待って、お兄さんなんて名前？」

「ユーリだ。じゃまたな。」

俺はそう言つて裕奈達から離れて行く。見えなくなったところで、そこそこ強めに認識障害の結界を自作魔道具の指輪で発動する。

「これぐらいなら普通の奴は気づかんだろ。さて、とりあえず世界樹に向かうか。」

結界を維持しながら世界樹に向かって歩きだすと、

「止まれ、ユーリ・ローウェル! 行かせる訳にはいかない!」

ガングロフィーニが現れた。が無視をして歩き続けるが、パン!!

「なんのつもりだ?。俺が誰かわかっているだろ。」

障壁で防いだが心臓の位置に銃弾が飛んできた。

「あの悪名高き、ギルド『凜々の明星』のユーリ・ローウェルだろ! ！お前の様な悪は私が正義の鉄槌をくわえる。ここに侵入したことを後悔するのだな! ！」

ガングロフィーニは俺からほとんど魔力を感じないのでなめている。コイツもうざったい正義の魔法使い（クズ共）のようだ。

ムカツクな、殺すか。

しかし、最後に一度だけチャンスを与える。

「警告だ。次に攻撃をしてきた場合、我ら凜々の明星への攻撃とし

しかるべき対応をする。そして、今頭を下げて消えればさっきのことも水に流してやる。」

そう言つて見逃してやろうとしたが、バカなことに。

「正義の魔法使いが悪に頭を下げるなど、あり得ない。悪は滅するのみだ！！」

パンパン！！

バカは銃を撃ちながらナイフ片手に突っ込んでくる。

「人が優しくしてやったのに、このバカ野郎が！！貴様は楽には逝かさんぞ！！出る。」

魔力の隠蔽を解除し、斬魄刀を呼び出す。そして、本気の殺気をぶつける。

「なっ！？」

さっきまでは余裕の表情だったが俺の圧力におされ、片膝をつき汗がにじんでいる。だが難とか立ち上がりこちらを睨み付けながら、
「やはりお前のような危険人物を生かしておく訳にはいかない。」
言い放ってくる。そして、魔力で強化したのか。放った銃弾は障壁を抜け、右頬をかすった。

「くつくくつ、はあーはっは。当てた、当てたな。これで貴様を殺しても一応正当防衛の理由ができた。さあ、シヨ一の開幕だ！！」
俺は人払いと認識障害の結果を張り直し、

「掻きまれ・・・『正殺地蔵』」

斬魄刀を解放する。

「なんだ！？刀が変化したのか？だが、そんな刀で何ができる。」
ガングロフィー二は刀の形が変わったので一瞬困惑したようだが、あまり斬れそうな形状ではないことに油断したのか無用心に突っ込んでくる。

「はあ、無用心過ぎだろ。幻狼斬！！」

俺は一瞬で後ろに回り込み背中を斬りつけた。

「ぐはっ！？」

あまり深くは斬れなかったが、この斬魄刀なら関係ない。

「なっなんだ！？動けない!?」

「バカが。相手の能力もわからないのに突っ込んで来るとはな。『斬った対象物の四肢の動きを奪う』それがこの正殺地蔵の能力なんだよ。」

優しい俺はわざわざバカに能力を教えてやる。しかし、こいつは予想以上にバカな様だ。

「くっ、この卑怯者め!! 毒なんて使うなど。正々堂々戦え!!」
本当に救えない程のバカだな。人の事を悪だと言いながら、卑怯？正々堂々？意味がわからん。もう駄目だ。ウザすぎる。

「この毒はな麻痺じゃなく、四肢の動きのみを奪うんだよ。つまり・

・・」

グサッ!!

ガングロファイーニの右腕に刀を突き刺す。

「痛みは毛程も消えない訳だ!! ホラ! ホラ! ホラッ!!」

「ギヤアアア!!」

何度も手足を突き刺すとギヤアギヤア五月蠅く悲鳴をあげる。イラついていたので最後に左腕を斬り落とす。すると、一番大きい悲鳴をあげる。

男の悲鳴など面白くもなんともないな。やはり、女の子の涙目と懇願の声が一番だよ。

「やめてくれえ。死にたくない。助けてくれえ。」

はあ、勝手に殺す気で突っかって来て『助けてくれ?』はあ。

「五月蠅いしウザい。もういい、死ねよ。」

俺は自分勝手な正義にイラつきもう殺すことにし、刀で首を落とそうとした時。

「すまないが、もうそれぐらいにして見逃してもらえないかい。」

「頼む。今は抑えてくれないかの。」

T3とぬらりひょんが現れた。

「ああ?なんで殺そうと向かってきた奴を見逃さなきゃなんのだ。」

」

「はは！！これで終わりだユーリ・ローウェル。学園長・高畑さん、早くこの悪人を、「ウザい！！」ウギヤ。」

二人が来たことで調子に乗ったバ力を気絶させる。

「そのところを難とか頼む。」

ぬらりひょんが頭を下げてくる。

「はあ萎えた。もういい、勝手にしろ。殺る気も失せた。」

めんどくさくなってきたので、斬魄刀を消しカバンからソファアを出してくつろぐ。

「彼の解毒をしたいのだが、解毒薬を持っていたらくれなかな？」

「ほっとけば一ヶ月ぐらいで治るだろ。」

わざわざ治す気はないので、適当に答える。

「で、これからどうするんだ？めんどくさいからさっさとしろ。」

「すまんが詳しい話を聞かせてもらいたいから学園長室に来てくれんかの。」

「はいはい、じゃあさっさと転移させる。俺は動くのはめんどい。」

極東最強の魔法使いなら転移ぐらいできるだろ。

「しょうがないの。高畑君、ここは任せるぞ。」

「わかりました。僕もすぐに行きますので。」

やっと移動か。おっと、

「おい、高畑。そいつの腕はきれいに斬ったから治癒魔法がそこそこうまけりゃくつつくぜ。まあ毒の方は世界最高クラスじゃないと解毒はできんがな。そのバカが土下座でもして頼むなら解毒薬をやってもいいぞ。するとは思わんがな。じゃ早く転移しろ爺。」

言いたいことは言ったので、爺に転移魔法を使わせる。俺はソファに寝転んだままだが。

一方その頃のリタは、

「ちよっと誰か！！ユーリがどこ行っただか知ってる人いない？早く

しないと言画があー！」ギルドメンバーにユーリの居場所を問いただしていた。

第二話 手紙×侵入×遭遇（後書き）

いきなりガングロをボコってしまいました。

ユーリは気に入らない相手には変なあだ名をつけます。

第三話 妖怪×交渉×新居（前書き）

一ヶ月も更新出来ず大変申し訳ない。仕事が忙しくて全然書けませんでした。

少しずつ書いてなんとか書き終わりました。

第三話 妖怪×交渉×新居

「で、どうするんだ？」

学園長室に轉移し一息してから妖怪に話しかける。

「そうじゃのう。とりあえず何故色々な意味で有名な君が此処に居るのか聞きたいかのう。」

「事務仕事が嫌になったから逃げ出したんだが。暇だし、前から興味のあつた世界樹の研究に來ただけだ。」

世界樹以外にも興味はあるが、表向きの理由としてはこんなものだろう。

俺の言葉を聞いて妖怪は少し考えこんでいたが、

「そうか。しかし、君が不法侵入をし一人の教師に行動不能になる程の傷を負わしたことについてはどうする気じゃ？」

と聞いてきた。

「不法侵入は悪かったが、あの GANGLO はアイツが悪い。俺がわざわざいきなりの心臓への発砲を許してやったのに実力の差もわからず向かってくるから。まあ、アイツに関してはおいといて。不法侵入したから割安で依頼を一つ受けてやるよ。」

いつもならこんな自称正義の魔法使いの依頼なんて受けないが、麻帆良に留まるためには仕方がない。それに、この妖怪なら俺みたいな奴は必ず・・・

「なら、君にはこの教師と広域指導員、あと夜の警備員をしばらくやってもらおうかの。ガンドルフィー二君の抜ける穴を埋めないといけないからの。」

やはり取り込もうとしてきたな。予想通りだ。

「俺は別に構わないが、あの GANGLO みたいに突っかかってきたらそいつの命は保証せんぞ。それでもいいならやってやるよ。」

そして、こう言えば

「一度目はできるだけ加減をしてもらえないかの。痛い目にあえば

大人しくなるはずじゃし。どうじゃ？」

「わかった。一度目は加減しよう。だが、絶対ではないからな。そいつが俺以外を巻き込んだ場合は殺す。」

「うーむ、まあそれでいいじゃろ。では、仕事内容についてじゃが。教師については女子中等部の2 - Aで副担任をしてもらう。担任は高畑君じゃから彼に色々聞いてくれ。教える教科は数学かのう。広域指導員についても高畑君に聞けば大丈夫じゃろ。夜の警備は顔見せの時に詳しく説明する。なにか質問はあるかの？」

よし、計画通りだ。ああ言っておけばもしもの為にこの学園で二番目に強い高畑の下に俺を組み込む。そうすれば2 - Aの副担任にされる。チヨロいな。

「特に問題はないが、できれば担当教科は国語にしてもらいたいんだが。」

別に数学は苦手ではないがやはり得意だった国語が楽しな。

「それくらい別に構わんよ。」

「よし、依頼内容は不満はない。次は期間と料金だ。期間は俺が副担任をする2 - Aが高等部に上がるまでの約二年間を基本とするが一年以上働いたら自由に辞める権利が欲しい。俺にも色々あるからあっちに戻らないといけなくなるかもしれないしな。料金については普通の魔法教師の給料と同じで。そして、期間中に他の依頼をしたければ別途に料金を請求する。期間中の依頼についてはできるだけ受けてやるが割引はしない。これで良いなら依頼を受けよう。」

まあ、こんなものだろ。魔法教師の給料がいくらか知らんが割安にはちがいないだろ。期間もこいつらにはちょうどいいだろうしな。

「うむ。大丈夫じゃろ。ではよろしく頼むぞい。」

「ギルド『凜々の明星』のユーリ・ローウェル。依頼を受諾した。こちらこそよろしく頼む。」

ソファーに寝転び会話していたが、一応めんどくさいが立ち上がり軽く頭を下げて依頼を受ける。

すぐにまたソファーにダイブしたがな。

コンコン、ガチャ。

「失礼します。学園長後始末は終了しました。」

ちょうどいいタイミングで高畑が戻ってきた。

「おお。ちょうど良かった。彼が君のクラスで副担任をすることになったので色々教えてやってくれないかの。」

「あっはい、わかりました。」

高畑は爺が俺を取り込むことを予想していた様ですんなりと了承する。

「僕は高畑・Ｔ・タカミチ、これからよろしく頼むよ。」

「ユーリ・ローウェルだ。よろしくな。」

高畑が自己紹介をわざわざしてきたので、面倒だが自己紹介を返す。ソファーに寝ころんだままだがな。

「そうだ。おい、妖怪「妖怪は止めてくれ！！」ちっ、じゃあ爺。俺はどこに住めばいいんだ？」

そういえば、住む場所をどうするか決めていなかったたので爺に聞いてみる。

「おお。そうじゃのう。生憎と今は教員寮に空室がなくての。そうじゃ！！ちょうど女子寮の管理人が止めてしまつての、お主に管理人を「断わる！！」ひょ！？」

「バカか貴様！！俺は男だぞ。しかも、俺はバカ共に狙われる可能性があるんだから危ないだろ。俺はどこか一人で住むべきだろうが貴様のその長い頭には脳みそが詰まつてないのか。」

爺が何のつもりか知らんが、バカな発言をしたので少しプチツときてしまった。

「そっそうじゃな。わかつた。どこか一軒家を探しておこつ。」

爺は慌てどこかに電話する。

「一つ聞いてもいいかい？」

「なんだ。」

爺が家を探しているので高畑が俺に質問をしてくる。

「君は意味もなく人を殺したことがあるかい？」

「ああ？あるわけないだろ。俺は何より罪のない無関係な奴が傷つくのが嫌いなんだよ。」

ポケットに手をつ込んで殺気を出しながら聞いてきたが、特に気にせずカバンから漫画を取り出し読みながら軽く答えてやる。

高畑はその答えに満足したのか殺気を引っ込める。

「そうか。悪かったね、いきなり変なことを聞いて。」

「気にすんな。」

軽く高畑が謝ってきたが短く返してやる。

「ユーリ君、家が見つかったぞ。家具はあるかの？」

そうこうしているうちに家が見つかったぞらしい。

「家具はいらん。必要な物はカバンに入っているからな。で、場所はどこだ？」

「了解した。場所は今から案内人がくるからいつしよに行けばわかるわい。」

「わかった。それで、仕事はいつから始めるんだ？」

とりあえず、仕事をいつから始めるのか聞いていなかったのて聞いてみる。

「色々準備があるから、明後日になるかの。明日は学園の地理でも確認しておいてくれ。」

まあ、そりゃそうだな。

コンコンッ

「学園長。案内にきました。」

話しているうちに案内が到着したようだ。

「うむ、わかった。」

「じゃあ、よろしく頼むな。」

「明後日のことは明日の夜にでも連絡するからの。」

ソファーと漫画をカバンにしまい学園長室から出ていく。

「学園長。本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫じゃろ。色々噂はあるが彼は一般人たちからはかなり慕われているらしいの。」

確かに少しは不安じゃが彼程の能力者を普通の魔法教師と同じ給料で雇えるなら安いもんじゃろ。

「まあ、しばらくは注意しておいてくれんかの。多分、問題は無いと思うのじゃがな。」

それに高畑君がおればなんとかなるじゃろ。

「わかりました。では、失礼します。」

「はあ、疲れた。」粗方家具の配置も終わったのでベッドに飛び込む。

用意された家は、庭付きの一軒家だった。場所は女子寮から1km程の辺りだ。

「女子寮に近いのは偶然なのか爺がわざとやったのか。まあ、別にいつか。それよりあの麻帆良に来たんだから楽しむぞ。・・・リタは何してんだろうな。」

一方その頃のリタは、

「あんたは何か聞いてない！？何でもいいから思い出して!!」

「そう言われてもですね。うーん・・・あつ！確か世界樹で木刀が作りたいとか少し前に言ってた気がしますね。」

「世界樹？旧世界の世界樹といえば、麻帆良の？誰か他の情報は無いの？」

ユーリの情報を少しゲットしていた。

第三話 妖怪×交渉×新居（後書き）

仕事がまだまだ忙しいので更新は不定期になります。

第四話 初登校×初授業×初尽くし（前書き）

完成しました。

少しずつ書いたので変かもしれませんが。

第四話 初登校×初授業×初尽くし

「みんなに発表があるんだ。今日から新しい副担任の先生がきます。」

朝のHRの時にユーリ君のことを発表をする。

「先生！私にはそんな情報は入ってないですよ。いつきまつたんですか？」

みんなはざわついているが、やはり朝倉君は質問をしてくる。

「実は今年度の始まりにくるはずだったんだけどね。色々手違いで遅れてしまっていたんだよ。」

本当のことは言えないので、ユーリ君の設定を話しておく。

「そうだったんですか。じゃあ次は、」先に先生に教室に入ってもらいたいんだけどいいかい？「そうですね。すみません。」

「じゃあ、入ってきてくれるかい？」

まだ朝倉君は質問をしてこようとしたので、それを制しユーリ君を教室に呼び入れる。

俺は今スーツを着て学園長室に向かっていたのだが、

「めんどくせえ。」

俺が麻帆良にきて二日後にはきたことを若干後悔している。

「爺、きたぞ。」

ノックもなしに扉を開けて入る。「おお、来たかユーリ君。では、職員室に挨拶に行くぞい。」

爺はノックについて何も言わなかったからこれからもしなくていいな。

「彼が手違いで遅れていたユーリ・ローウェル君じゃ。担当教科は

国語で2・Aの副担任をやってもらう。色々教えてやってくれ。」

「ユーリ・ローウェルです。こんな見た目と名前ですが、日本育ちなので国語についての心配はありませんので。まだまだ若輩ですがよろしく願います。」

パチパチパチ

職員室で自己紹介をして歓迎の拍手があがるが何人か敵意剥き出しでこちらを睨んでいる。うざい。

席に案内され着席するとまず一人の男性教師が近づいてきた。

「初めまして、私は主任を務める新田だ。わからないことがあれば何でも聞いてくれ。」

「ありがとうございます。ご迷惑をかけてしまいかもしれませんが、これからよろしく願います。」

原作にも出ていた新田先生に挨拶をしてもらった。

ネギまの世界で貴重な常識的な人物だが、魔法のせいで大変苦勞をしている。多分、この人は千雨みたいに精神魔法の耐性があるのだろう。麻帆良で『普通』を少しでも『異常』と思えるみただったしな。千雨に比べたら微々たるもんだろ。まあ、男だし。あまり興味はないがな。

「ユーリ君。それじゃ、教室に行こうか。」

「はいはい。」

高畑と共に教室へ向かう。

「クラスの名簿は渡しておいたけど、何人か名前を覚えられたかい？」

「んっ？ああ、名前ね。一応全員覚えてきた。」

原作を読んだ時から大体は覚えていたから簡単だったな。

「そうか、なら大丈夫だね。教室に着いたらまず僕が一人で入って説明するから。それから入ってきてくれるかい。」

「わかった。」

教室の前で待っていると高畑に中から呼ばれたので教室の中に入る。

そのまま教卓まで歩いていく。

「ユーリ・ローウェルだ。国語を担当する。よろしくな。」

「先生！質問いいですか！」

軽く自己紹介をしたが、それでは満足しないらしく朝倉が質問をしようとするが、

「断る。」

「ええ、そんなあ。」

「嘘だよ。ほら、言ってみな。」

「ありがとうございます。じゃあいきますね。まずは名前をもう一度お願いします。」

どこからかマイクを取りだし、インタビューが始まった。

「ユーリ・ローウェルだ。」

「歳と出身は？」

「23でこう見えて日本出身だ。」

「趣味と特技は？」

「趣味は研究・開発に好奇心のままに行動すること。で、特技は剣術に手品だ。」

「彼女はいますか？」

「残念ながらないな。」

「好きなものと嫌いなものは？」

「好きなものは女性の恥ずかしがってる顔に恐怖に染まった顔、それからなにかを我慢している顔だな。嫌いなものは、俺の邪魔をするやつ、話を聞かないやつに意味なく人を傷つけたり、巻き込んだりするやつだな。」

「・・・先生つてもしかしてS？」

「違う！DSだ！！」

「いやいや、そんなに威張って言うことじゃないと思うんだけど！？」

「質問は終わりか？」

「じゃあこのクラスでタイプの娘は誰？」

「そうだな。みんな可愛いから迷うが、しいて言うなら明石・綾瀬・桜咲・長谷川・宮崎だ。」

「何故その五人に？」

「明石は一昨日ここに着いた時に喋って元気でリアクションも良かったから。桜咲は凜とした感じで、更に剣術やつてるみたいだからだな。綾瀬と長谷川は思慮深そうで考えて行動できそうだから。最後に宮崎は、小動物的で臆病な雰囲気俺のS心をくすぐる。」

「本屋逃げるー！！」

最後の宮崎の時に薄く笑いながら言うと、身の危険を感じたのか宮崎はビクついている。可愛いなあ

「まあ質問はこれくらいで終わりな。じゃ、国語の授業で。」

時間もなくなったのでインタビューを切り上げ。手を振りながら教室を出た。

さて、授業の準備でもするか。

「裕奈、あの人先生だったんだねえ。裕奈は聞いてなかったの？」

休み時間になりまき絵がユーリさんについて話しかけてきた。

「ゼーんぜん、聞いてないよ。私もびっくりしてるし。」

何で先生なのに不法侵入してたんだろ。

「はあ、疲れた。」

今日は2・Aの授業はなかったが他のクラスで三時間授業をした。緊張はなかったが、さすがに初授業だったので少し疲れた。

「さて、書類仕事も終わったし帰るか。」

周りの教師に挨拶をして帰ろうと席を立つと同時に、

「良かった。ユーリ先生まだ帰ってなかった。」明石が職員室に顔

を出した。

「どうした、明石。何か話か？」

「2-Aのみんなで先生の歓迎会を準備したから呼びに来たんだよ。」

「歓迎会か。まさか俺にも有るとはな。しかし、校舎内で勝手に飲み食いで大丈夫なのだろうか？」

「新田先生。こう言ってもらっているのですが大丈夫なんですか？」

「とりあえず、主任の新田先生に聞いてみる。」

「ん？ああ、羽目を外し過ぎなければ大丈夫ですよ。生徒たちの好意ですし楽しんでください。」

「そうですか。わかりました。では、行ってきますね。」
正式に許可を頂いたので明石といっしょに職員室を出て教室に向かう。

「ねえ先生。気になったんだけどさ、どうして一昨日は不法侵入してたの？」

「そっちの方が面白そうだったからな。」

「ええー！？」

そんなことを話しながら教室に着いた。

「あつ来たー！！」

「先生遅いよ。」

「ほら、こつち座つて。」

「はいはい。」

教室に入ると何人かに引つ張られ真ん中に座らされる。

「よし。みんな揃ったね。じゃ、」「」「かんぱーい。」「」「」

しばらくみんなと喋っていたが、さすがにあのハイテンションには疲れたので壁際で休んでいると。

「大丈夫かい？」

「ん？アンタか。別に大丈夫だ。ただ、あのハイテンションに疲れ

ただだからな。」

いつの間にか合流していた高畑がやってきた。

「すぐに慣れるよ。麻帆良だからね。」

「そうかい。じゃ、そろそろ生徒と交流してくる。」

まだあまり喋れていない生徒の方に向かおうとするが、

「午前1時に世界樹前の広場に集合だそうだ。警備の説明と顔見せをするみたいだよ。多分、テストがあると思うから準備をしておいた方がいい。」

「はあ、わかった。」

一方、その頃のリタは。

「つまりあのバカユーリは、

旧世界に行った

世界樹で木刀を作りたい

妖怪について調べていた

神鳴流を見よう見まねで練習していた

完全魔法無効化能力にユーリと私が使えるオリジナル魔法が通用するか研究していた

何故か教員免許を持っている

とりあえず、わかったのはこれくらいで。これらの情報で推測できるユーリの居場所は、（妖怪と神鳴流で）日本の（世界樹と教員免許で）麻帆良に居て。教師をしているはずだけど、完全魔法無効化能力がわからない。麻帆良に能力者が居るの？うーん、まあ行ってみればわかるでしょ。よし、なら早く準備を「ダメですよ。行かせる訳にはいきません。」ちょ、なんでよ。」

「なんでって、只でさえボスがサボって仕事を溜めてるんです。代

理まで居なくなったら誰がやるんですか。とにかく、溜まりに溜まった仕事を終わらしてから行ってください。わかりましたか！」
「くっ、わかったわよ。やればいんでしょ、やれば！もう、ユーリのバカー！！」

五話 説明×模擬戦×お兄様？（前書き）

長らくお待たせしました。

今回も少しずつ書いたので変な所が有るかもしれませんが、どうかご容赦をお願いします。

あと、感想で行間が空いてないので読みにくいと言われましたので、一応今回は行間を少し空けてます。

五話 説明×模擬戦×お兄様？

「寝みい。もう帰っていいか？」

わざわざ夜中に呼び出され、長々と仕事の説明。更に、麻帆良が狙われる理由を聞かされるなんて飽きない方がおかしいだろ。

狙われる理由もこいつら馬鹿共のせいだし。はあ、めんどくせえ。

「すまんがもう少し待ってくれんか。後は、実力確認のテストだけじゃから。」

確認か。別に GANG 口倒したんだし必要ないと思うんだが。

「相手は誰だ？」

「そうじゃのう、特に決まっておらんし、希望はあるかの？」

「誰でもいいのか？」

「かまわん。」

「おつ、マジで？なら、魔力封印無しのエヴァンジェリンと闘いたい。」

真祖と殺ることなんてなかなか無いから興味あるし、真祖の不死性はどの程度までなら再生するのか実験だな。

それにより、あのエヴァンジェリンを虐めて、あのプライドをへし折り、屈伏させてやったら絶対楽しいだろうな。

そんなことを考えていると、爺は慌てたように頭をかきながら

「それは無理じゃよ。」

と却下された。

「はっ？なんでだよ。てめえが誰でもいいって言ったんだろが。」
「それはそうじゃが、エヴァンジェリンの封印は誰にも解けないんじゃないよ。諦めてくれんか。」

「なに言ってるんだ？魔力封印は学園けっく」ちよつと待った！」「
んだよ高畑？」

「なんでその事を知っているのかわからないけど、それは言わないでくれないかい？」

エヴァンジェリンの封印について喋ろうとしたら高畑が急いで言葉を被せる。

そして、気づかれていないかエヴァンジェリンの方をチラチラ見ながら口止めをしてきた。

しかし、どうやら茶々丸と会話をされていて、エヴァンジェリンは気づかなかった様だ。おもしろくねえな。

「わかったわかった。今回はエヴァンジェリンを諦めてやるよ。」

「すまないね。代わりと言っただけど僕が相手をしようか？」

「却下。代わりは、さっきから敵意剥き出しの高等部の女と桜咲だ。」

仕方なくエヴァンジェリンは諦めたのに代わりがむさ苦しいおっさんの高畑なんて嫌に決まっている。

それなら女の子を虐めて楽しむ方が100倍マシだ。

「実力差が有りすぎんかの？それにまだ生徒じゃしの。」

「大丈夫だつて。ハンデ付けるし、人数も女の子だったら増やしていいから。とりあえず、呼んでみる。」

「仕方ないのう。高音君に刹那君、こっちに。」

「「はい。」」

爺に呼ばれ、二人がやって来る。
俺の方を睨みながらだが。

「何でしょうか、学園長？」

桜咲が呼ばれた理由を爺に問いかける。

「うむ。二人にはユーリ君の模擬戦の相手になってもらいたいのじゃ」「やります。やらせてください！！」「」
爺が言い終わるとほぼ同時に高音が承諾をした。

ほとんど考えずに答えてるな。桜咲は近衛関係、アイツはガンゲロの敵討ちか？

「そっそうか。では、刹那君は？」

高根の勢いに若干吃りながら刹那に改めて問いかける。

「やらせていただきます。」

「うむ、わかった。では、頼むぞい。」

「「はい。」」

「それと、各一人づついつしよに戦う者を選びなさい。」

「わかりました。では、私は龍宮を。」

「私は愛衣です。」

ふむ、あの二人か。これは、おもしろくなるな。

「いいじゃろ。では、呼んで来なさい。」

爺に言われ、二人はそれぞれ急いで呼びに行く。

どうやって戦うかを考えていると、四人がやって来た。

「ではルールじゃが、色々やり過ぎない様にだけじゃ。範囲は結界内の広場のみ。後は、お主らに任せるわい。」

爺が俺を見ながら色々を強調しながら喋り、後ろにさがっていく。

それを見てから、剣を抜いてこちらに向けながら桜咲が喋る。

「あなたの狙いはなんですか？」

「狙い？よくわからないなあ、なんの事だ。俺は爺に頼まれて教師と警備員をやってるだけだしなあ。お嬢様が近衛このかだとか、なんて知らないぞ。」

「貴様！！やはり、お嬢様が狙いか！！」

「待て！！刹那止めろ！！」

ニヤニヤしながら答えてやると、桜咲は怒りながら斬りかかって来ようとするが龍宮に止められる。

「まあまあ落ち着けよ。別に俺から魔法関係に巻き込んだりしない。」

「そんなの信用できん！！」

「わかった。じゃあ、こうしよう。この模擬戦でお前らが勝ったらこの学園から出ていき、金輪際近づかない。だが、もし俺が勝てば罰ゲームを受けてもらう。いいな。」

「いいだろう。貴様を倒し、お嬢様を守る。」

「馬鹿！！刹那頭を冷や「龍宮。」くつ。」

いい感じに怒りで頭が回らない桜咲は俺の提案を受け入れてくれた。龍宮はそれを撤回させようと声をかけるが、割り込んで止めさせる。

そして、桜咲と喋っていて放置していた高音に意識を向ける。

「で、お前はガングロフィーニの敵討ちってどこか？」「ガンドルフィーニ先生です！！そうです、あなたの卑劣な手段によって動けない先生に代わって、あなたを倒します！！」

「そうかそうか。なら、お前も桜咲と同じで勝ったら俺が出ていき、負ければ罰ゲームでいいか？」

「ええ、構いません。あなたの様な卑怯者、私が叩き出してあげます。」

「はいはい。じゃあ、始めるか。」

適当に流し、斬魄刀を出現させ準備をする。

それを見て、四人を20メートル程距離を取り武器を構える。

「では、準備はいいかの？くれぐれもやり過ぎない様にじゃぞ。」

「わかってるって。」

「……はい。……」

俺たちが武器を構えたので、爺が最後の念押しをしてきたので軽く返事をする。

「よし。では、始め！！」

爺の合図で戦闘が始まる。

まず、龍宮の援護射撃の中桜咲が夕凧を手に瞬動で近づいてくる。

「残念。」

弾を避け、刀を受け流し、体制が崩れた桜咲を高音が影で作った使い魔の方に蹴り飛ばす。

「ぐっ!？」

「おいおい、そんなもんかよつと。」

サイドステップで殺到してきた魔法の射手と銃弾を回避するが、その先には高音が影を身体に纏い強化した拳を振り下ろしていた。

「終わりです!!」

「うわー当たるー（棒読み）。」

スカン。ズドン!!

「へっ!？」

「ふっ、残像だ。」

「っ・・・!？」

高音は確実に当たったはずが、そのまま体を通り抜けたことによる驚き、マヌケな声を上げながら地面を殴りつけた。

地面を殴ったことにより土煙が立ち上ぼり高根と俺の姿を隠したので、声を出させない様に口を押さえながら一気に首をしめて気絶させる。

桜咲達も勝負が着いたと思ったのか動きが止まっていたので、龍宮を後ろから蹴り飛ばす。

「龍宮!？ぐっ。」

「貴様も眠れ。」

龍宮がぶっ飛んだのを見て桜咲はやっと気づくが、俺は桜咲を峰打ちで意識を刈り取っていた。

「続けるか？」

何が起こったのか周りで観戦していた奴らの大半は着いていけて無いなか、いち早く気づき距離を取っていた佐倉、いや、愛衣に問いかける。

「いえ、降参します。お兄様。やっぱり負けちゃいましたね。」

五話 説明×模擬戦×お兄様？（後書き）

本当にすみません。

仕事が忙しく、更に体調を崩してしまい全然書けませんでした。

それでも、コツコツ書いてみましたが・・・駄文過ぎで申し訳ない。

次回もいつ更新出来るかわかりませんが、頑張って早く仕上げたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3608t/>

さぁ野菜痛めを作ろうか

2011年10月7日08時37分発行